78

誌上発表

# 『万病回春』の初版本

小曽戸　洋
武田科学振興財団杏雨書屋

『万病回春』8巻は日本の漢方医学に最大の影響を与えた中国医書の一つと言って過言ではない．著者の龔廷賢（生没推定1539～1632）は明の太医の職にあり，生存中に『古今医鑑』（1577年初版），『種杏仙方』（1581年初版），『万病回春』（1588年初版），『雲林神彀』（1594年初版），『魯府禁方』（1594年初版），『寿世保元』（1615年初版），『済世全書』（1616年初版）を刊行した．いずれも速やかに日本に輸入され，翻刻，流布したが，『万病回春』の受容は当時の中国医書の中でも群を抜き，和刻本は30版種に達するほど翻刻を重ねた（詳細は小曽戸・真柳編『和刻漢籍医書集成』所収の該書解説参照）．8巻の大冊でありながら30回も和刻の異版が存在するとは，他の医方書には類がない．ある程度の医者の家には『衆方規矩』『古今方彙』『医方大成論』などと並んで『万病回春』はあったであろうし，臨床に際して使われたであろう．日本の古医書（版本）には綺麗なものが多いが，『万病回春』は手擦れ本が多い事実がそれを示している．

筆者はかつて『万病回春』の現伝本書誌を研究したことがある．そのとき中国版本を博捜したが，『万病回春』の万暦16年（1588）初版本を発見するには至らず，「毎巻首に『太医院医官金谿雲林龔廷賢子才編集／門人医官……（中略）……／金陵書房対峯周曰校刊行』といった列銜名のある初刊がかつて存在したと思われるが，いま伝存しない．」と書いた．ところがその伝存品がこのたび確認されたのである．

毎年恒例の東京古典籍展観大入札会が昨年は11月15～18日に開催され，筆者は16日の展観に入場した．中国版医書はいくつか出品されていたが，筆者の目を引いたのは1005番「新刊万病回春　龔廷賢撰　万暦十六年閶門書房得泉葉氏校刊」とある古渡り本（江戸前期に日本に到来した中国本で日本製の表紙が着せてある）であった．表紙に行書体で「雲林神彀」と書いた古い題箋が残存している（「雲林」は龔廷賢の号）．

万暦16年刊本なら未発見の初版本である．しかし初版本は確か周曰校が刊行したはずである．若干不審には思ったが，武田科学振興財団の高配のもと入札を依頼した．中国古版本は頃日，中国に流出することがしばしばあるので危惧したが，幸いこの書は武田科学振興財団杏雨書屋の蔵に帰すことを得た．

杏雨書屋に入庫後，当該書を熟覧したところ，巻2・4首に「閶門書房得泉葉氏校刊行」，巻5首に「閶門書房得泉葉氏校□行」，巻8首に「閶門書房得泉葉氏校刊□行」とはあるものの，その大部分は埋め木による修刻である．ところが巻6首には「金陵書房■峰周曰校刊行」の初版文字が埋め木による修刻を免れて残っている．■は対の文字が相当するであろう．「周曰校」の「周」は姓で，「曰校」は名である．すなわち本来は「周曰校の刊行」であるが，「校」の字が紛らわしく，後世，「周曰の校刊」（校刊とは校正して刊行すること）と誤読されるようになってしまった．そういう筆者もその誤りを踏襲してきた過去がある．当該書の場合も同様，修刻の時点から「校」の字を「校刊」に結びつけてしまったようで，これでは後世を誤るのも無理はない．

今回武田科学振興財団杏雨書屋に入庫した中国古版，古渡りの『万病回春』は，刊行書肆が周曰校から葉得泉に修刻された後刷本ではあるが，周曰校の元来の刊行者名前を残した万暦16年初版本であることは疑いない．天壌間一品であろう．『万病回春』初版本の出現という点，また「周曰校」の姓名を再確認するうえで意義があろうと考え，報告に及んだ．